

I・M・S
FRONTIER



青山 胤道像

100年前の香港ペスト大流行 北里とともに起因菌の発見を競った

黒死病とも言われ恐れられた伝染病ペスト。特に14世紀にはヨーロッパ全域で流行した。死亡率60%から90%。そのペストが香港で大流行した1894年、我が国の医学界の代表として北里柴三郎とともに政府から原因究明のため現地に派遣された。

ちょうどいまから100年前のことになる。当時はまだペストの起因菌が発見されてい

なかった時代である。香港滞在2週間の間に19体の解剖を行い、45名のペスト患者を診察。自らもペストにかかり死線をさまようなど、文字通りペスト起因菌の発見に全力を傾けた。

帰国後、全国の医師たちによって歓迎会が開かれ、北里とともに銅像が贈られた。それが、医科研1号館2階の所長室前にある青山胤道像である。

1882年東大卒。ベルリンに留学後、1887年東大教授に就任。東大青山内科の主宰者として長く日本医学界の指導的立場にあり、癌研究会会頭、伝染病研究所長などを歴任。1914年、医科研が内務省から文部省に移管され、東京帝国大学へ組み入れられた際、当時、医科大学学長と兼務して第2代所長となった。

発刊にあたって

東京大学医科学研究所所長

廣澤 一成



医科研 NOW の発刊にあたり、

医科研での情報の流れについて考えていることを話させていただきます。

私が所長に就任する際、まず行ったことの1つに、医科研で働いている人数の調査がありました。

そして、予想以上に多人数が、さまざまな部署で働いていることを知りました。

これは就任挨拶のなかでも述べたことです。

そして、それ以来感じていることは、研究所構成員、研究所に出入りする人達、

更には、研究所に関係する人達に、医科研の現状がリアルタイムに、

現実感をもって伝えられているか、いささか疑わしいということでありました。

教授以下のスタッフは各研究部門、施設に優秀な人材がそろっており、

第一級の研究成果を挙げております。

しかし、医科研全体としては、研究がどのような方向へ動いているのか、外部の人達には勿論、所内でも相互理解が充分であったとは思えません。

例えば、誰がどのような受賞をしたか、百周年を期に作られた基金はどのように活用されているのか、新任教授はどのような経歴の人か、人事異動で来た事務の新しい人は、新しい病院のスタッフはどの人か、などなど、私達が自分の仕事に没頭していると知らずにすぎている医科研内の動きが随分あります。

私自身の経験からしても、このような状態におかれると、

次第に自分が医科研という組織のうちに在ることについて考慮を払わなくなりがちになります。

構内で会う人、廊下ですれちがう人にも知らない顔の人が増えてきました。

組織が肥大すると当然の現象でありましょう。

このような感想を2、3の方々に漏らすうちに、相互理解と外部へ向けての医科研の動きを紹介するためのパンフレットを作ってみようということになりました。

所長室には大学、学部、研究所などの紹介のパンフレットが多数届きます。

それらも参考にして、編集方針の検討をかさねここにお届けする医科研 NOW 第1号の誕生となった次第です。

本年4月には新しい大学院生、人事異動による新職員の方々など多くの人達を医科研は迎えています。

出て行く人、新しく来る人による組織の新陳代謝は組織を陳旧化させない知恵であります。

円滑な代謝が医科研の一層の活気を産むと信じております。

そのための手段の1つとしてこの医科研 NOW が役立ってくれるものと期待し、

ご協力を所員の皆様方をお願いいたします。

平成5年11月29日

Seoul National University Yim 所長他1名来訪。学術交流について意見交換。

平成5年12月2日

Korea Institute of Science and Technology, Biomedical Science Center Juhn 所長他1名来訪。

平成6年2月9日

平中企画調査官他2名が来所し、無菌病室、ゲノムセンターを見学した。

学友会セミナー

日 時	演 者		演 題
1月14日	矢倉英隆 博士	財東京都神経科学総合研究所 微生物学 免疫学研究部副参事	リンパ球活性化機構のチロシンフォスファターゼによる制御
1月19日	畠山昌則 博士	Whitehead Institute MIT, U.S.A.	Integration of multiple G1 cyclin signals in the functional inactivation of retinoblastoma protein
1月21日	山村研一 教授	熊本大学医学部 遺伝発生研究施設	哺乳類発生の分子機構解明のためのアプローチ
1月26日	木戸 博 博士	徳島大学酵素科学研究センター	HIV 感染と細胞内プロテアーゼ
2月3日	Arthur Konnerth 博士	Physiologische Institut, Universität des Saarlandes	Calcium-dependent synaptic plasticity in cerebellar Purkinje neurons
2月8日	森本幾夫 博士	Harvard Medical School/ Dana-Farber Cancer Institute	CD26, a key costimulatory molecule on CD4 memory T cells and its possible clinical relevance in AIDS
2月16日	中畑龍俊 教授	東大医科研 癌病態学研究部	造血幹細胞および肥満細胞の増殖、分化機構
2月23日	金川修身 博士	ワシントン大学 病理部	Resistance of Mice Deficient in IL-4 to Retrovirus-Induced Immunodeficiency Syndrome (MAIDS)
2月24日	Dr. Genoveffa Franchini	Head, Animal Models and Retroviral Vaccines Section, Laboratory of Tumor Cell Biology, National Cancer Institute, NIH, USA	New insights on HTLV-1 pathogenesis and phylogenesis
3月8日	宮島 篤 博士	DNAX 研究所 (カリフォルニア、パロ・アルト)	Cytokine receptors and Signal Transduction: Recent Progress and the role of JAK kinase
3月24日	Dr. Sankar Mitra	Sealy Center for Molecular Science Medical Branch at Galveston The University of Texas TX, U.S.A.	Regulation of Alkylation damage repair in mammalian genome

C LINICAL RESEARCH WARD

先端的プロジェクトの推進

当研究所附属病院の前身は、明治25年（1892年）に設立された大日本私立衛生会附属伝染病研究所（初代所長 北里柴三郎）に附置されたことに始まり、その後の研究所の所管の変遷に伴い現在の形に至っています。

設置当初から第二次世界大戦後にいたるまでは、伝染病対策のための特殊な診療施設でしたが、その後、外科、放射線科、人工臓器移植科そして感染免疫内科が開設され、当初からの内科を含めた5診療科が揃い、そのほか、検査部、輸血部、手術部、薬剤部、看護部等を設置しています。また、放射線室、手術室、材料室、内視鏡室、透析室、核医学検査室、病歴中央管理室が置かれ、診療の充実を図っています。

診療内容も時代と共に大きく変貌を遂げ、プロジェクト病院として機能することにより、その存立基盤を明確にしてきました。具体的には、骨髄移植、エイズ診療、臓器移植という3本のプロジェクトが立てられました。

今年は、「エイズ総合診療部（仮称）」が認められ、外来、病棟、



サイクロトン棟（廃止）の改修工事も始まります。

今日、一般の大学病院においては、その存在基盤が問われていますが、当院は、これからは数少ない研究所病院としての特殊性を活かし、基礎研究部との密接な連携のもとに分子医科学に基づいた細胞移植・遺伝子治療という先端的プロジェクトを全国共同利用の形で進めていく計画です。

AWARDS

受賞

細菌研究部
岡田信彦

黒屋奨学賞

1993年3月25日



細菌感染研究部
金ヶ崎士朗

日本細菌学会浅川賞

1993年4月1日



病態薬理学研究部
浅野茂隆

日経BP技術賞
（医療部門）

1994年4月6日



ウイルス研究部
野本明男

日経BP技術賞

1994年4月8日



ADMINISTRATION OFFICE

昨秋より構内のあちこちが掘り返されたり、工事車両の往来などで皆様にはご迷惑をおかけしておりますが、ここで改めて平成5年度から平成6年度の工事関係の概要をお知らせすると共に、更なるご協力をお願いします。

看護婦宿舎の改修及び新営

昭和43年建築の1棟を3室を2室(ワンルームマンション形式)に改修
昭和8年建築の1棟を地上4階建てに改築した。



看護婦宿舎外観図



新しくなった看護婦宿舎の内観

3号館ピロティの模様替え工事

ピロティの一部を仕切って分子生物学研究部の研究室とした。

冷凍機及び外調機の改修

動物センターチラーユニット・診療棟チラーユニット・一号館外調機が老朽化で修理不能となり、また、チラーユニットにはフロンガスが使用されているため地球環境問題からも改修することになった。

動物センターについては平成7年3月完成予定

特別高圧変電設備の設置

本研究所は、東京電力から2,050KWで供給を受けていたが、本来2,000KW以上は特別高圧変電設備の設置が必要となっている。今回更に看護婦宿舎やRⅠ発生工学棟などで需要の増が見込まれるため、設置することになった。

RⅠ・発生工学棟新営

■増設建物と既設建物との関係

発生工学棟———既設第一小動物舎・動物センター棟で一般動物の飼育実験研究をし、実験棟では発生工学実験研究及びDNA組み換えモデル動物隔離飼育を主として行う。

RⅠ施設———1、3号館のRⅠ管理システムを取り込み集中管理を行う。

各RⅠ管理区域の出入口について、磁気カードシステムによる個人別入退出管理を行う。

老朽建物の取り壊しと、そこに収容されている研究室等の取り込みを行う。

平成7年3月完成予定

▶平成6年5月1日から電話番号が変わりました。

- ・内線には従来の番号の前に5を付けてください。———例 210→5210
- ・外線からは局番5449に新内線番号を付けてください。———例 ダイヤルイン番号 5449-5210

お願い！ 名刺など外部に渡るものは、新番号の記載にご協力ください。

代表番号の変更はありませんが、交換業務要員が半減するため集中するとかかりにくくなります。

▶平成6年8月1日からFAX番号が変わります。

Keystone Symposium に参加して

参加者の power に感心

癌細胞学研究部
生田統悟



Taos Pueblo. アメリカインディアン集落である。



2月下旬から3月上旬にかけて New Mexico 州 Taos で開かれた Keystone Symposium に参加した。博士課程の4年間、1度は海外の学会へと思っており、絶好の機会であった。しかしながら、初めての海外経験であり、その不安から学会直前になっても何の準備もせず、「行きたくない」を繰り返していた。

空港から Taos へは砂漠と低木の続く約3時間の道のりである。日本中に知れ渡った Santa Fe を過ぎた頃、キーを閉じこみレンタカーの窓をたたき割るというアクシデントにも遭遇した。

会場は日本風に言うと公民館である。私が参加したのは PKC と脂質の合同シンポジウムである。小規模であるがゆえにテーマが集中しており、自分の研究分野に対する見識を深めるよい機会であっ

た。このシンポジウムは、別名スキーシンポジウムと呼ばれ、朝から深夜までハードなスケジュールである。午前8時から11時まで講演、11時から午後4時までではフリータイムであるが、田舎町ではほかにすることもなく、スキー場へ行くことが半ば義務付けられている。4時から6時までが示説、夕食後8時から11時まで再び講演がある。老いも若きも研究者たちは皆 tough である。

自分の発表では1人でも多くの人をつかまえることを心がけたが、自分の考えている事は何とか言えても、相手の言う

ことの半分は理解不能である。たださえ日本人はディスカッションが苦手といわれるのに英語力の無さは致命的である。2人に続けて同様な質問を受けたとき、2人めの人に私が言葉に詰まっていると、私を抜きにしてその2人でディスカッションが始まってしまったのには危機感を覚えた。

最終日の前の晩には banquet が催され、それまでの公民館がきれいに飾られた。学問する時には学問、遊ぶ時には思いっきり遊ぶという人達の「power」を感じた学会であった。

編集後記

この度、医科研広報パンフレット「医科研 NOW」発行に当たり、編集長としてこの新たな試みに参加することとなりました。しかし、編集などと言う事には、小学校時代の学級新聞以来無縁の生活をしてきたので何事もとまどう事ばかりでした。何とか無事に第1号の発行にこぎ着けたのは、偏に、快く協力していただいた皆様のお蔭と感謝しております。

す。

創刊号と言う性質上、内容的には色々の不備な点もあろうかと思いますが、全国一の規模を持つ医学・生物学系の附置研究所である医科学研究所の活動を解りやすい形でお伝えすることを目指し、更に改善を加えながら、皆様に理解していただく上で些かでも役に立つものを作って行きたいと考えております。 ⑧